



1975-1981

根性は最後の5分



後列左より、山岡・高馬・白石・今松・蓼沼・千原・加藤・大浦・市川先生
前列左より、佃先生・上村・井上・藤岡・藤井・亀井

名門復活を目指して

強豪とばかりあたって惨々だった中学時代。名門復活を目指して戦った高校時代。しかし残念ながら強い六甲を復活させる役目は後輩に委ねることになってしまった。中1入学当時からそのサッカーセンスを佃先生に見込まれた上村、異常にタフなプレーの今松、敵に囲まれてもヒョイと抜け出せる名手井上、快速の千原ら好選手はいたが、38期だけでは強いレギュラーメンバーを組むことができず、特にDF陣を中心に39期に頼らざるを得なかったところが大きなウィークポイントであっ

た。しかし、主に練習以外で培った強力なチームワークでゲームを戦い、かなり頑張れたと思う。

印象に残る試合としては、当時実力ナンバーワンであった御影工業戦。前半は押しまくられながらも、何とか失点を1点に抑えた。後半は、緊張もとれ伸び伸びプレーできるようになり、試合は互角。そして相手反則で得たPKを上村が決め、同点。その後一進一退の状態が続き、引き分けかと思われた終了直前、御影工業にPKが与えられ、それを決められたところで試合終了。その後、県中央大会で御影工業は優勝。惜しくも王者に土をつけることはできなかったが、我々にとっては、

何とか行けるぞという確信が得られた有意義な試合だった。

結局、我々は、BEST16止まりで、目標であったBEST8入りは果たせなかったが、六甲のサッカーで得たものは、我々の大きな財産として今も各人の中に残っている。耳にはタコが残っている「痛いの後ヤ!」、「根性は最後の5分」…。 [千原 勝]

あの38期はこんな奴の集まりだった。

井上 学 小柄であったが細かいテクニックは抜群で、密集の中でも簡単に突破してきた。そのプレーと顔立ちから「アルディレス」と呼ばれた。サッカーに対して非常に真面目な反面、

普段はいたずらをしては発狂するといった変わった人間である。

今松 泰 彼のスタミナ源が何であったかは未だに謎であるが、とりあえず凄い。いつも走っていた。仮面ライダーのような腹筋に鉛筆をはさんでケタケタ笑っている彼だけが、我ら38期の“すぐ休むサッカーチーム”の救いであった。

上村 忠嗣 度胸と気合だけ？でサッカーをする38期の独裁キャプテン。順調に伸びれば県選抜に選ばれる力は十分と思われたが、いい加減な性格が邪魔をして、皆の期待には応えられなかった。サッカーに限らず、色々な面（特に、ロクでもない面）でも38期の中心であった。

大浦 厚志 怒濤のがぶり寄りを得意とし、レフトバックで活躍した。理由は定かでないが、ラマ僧と称された。また普段、「アツシ」と呼ばれたが、これは、当時高倉中学の有名プレーヤー「キヨシ」と名前、体型とも似ていたからである。

加藤 敬人 上半身を微動だにせず下半身だけで走る。快速のレフトバックであったが、高2の頃から来なくなってしまった。そういえば、佃先生によくシバかれていたような…。

亀井 勝明 小学校時代、神戸FCに入っていた我がチームの中学時代の不動のスイーパー。快速を誇ったが、ボールがくるとあわててしまう弱点を持っていた。また目が悪いので、ボールの目測が苦手であった。

高馬 洋一 38期のマネージャー。但しマネージャーとしてどのような仕事を成したのか、既に我々の記憶には残っていない。“笑っていいとも”でブラウン管にも登場したことのある38期きっての芸人であった。

白石 明彦 スライディングとヘディングをしない不動のライトバック。ボールや人を追いかけるとき、特に速く走ったので犬コロのようだともいわれた。佃先生が直々に丸刈りをしたこともあった。市川先生にはヘディング練習でよくしごかれていた。

蓼沼 直樹 全試合ゴールを死守した38期の守護神？。38期きっての綺麗

好きでどんな試合でもユニフォームを汚さないのが彼のプレースタイルである。大学に行かずフランス料理の勉強をすると宣言したにもかかわらず推薦であっさり大学生になった“なめた奴”

千原 勝 健脚のセンターフォワード。キャプテンの不在時には、副キャプテンを差し置いて、練習を取り仕切った熱血真面目人間。時折見せる切り返して、シュートチャンスを逃してしまう。練習試合では点を取るのだがなぜか公式戦での得点数は少なかった。

藤井 六郎 むかーし昔、赤い頭巾の六ちゃん、なぜかサッカーゲームと呼ばれていました。だけど、六甲サッカー部の最重要機密事項は六郎邸にて催される“夜の秘密会議”で全てが決定されていたという、影の帝王でしたとさ。

藤岡 洋介 柔軟な膝を生かしたフェイントを得意にしたレフトウィング。しかし、クネクネし過ぎて相手バックにボールをかっさらわれることもしばしば。スペイン語の歌を歌ってディアス先生に絶賛された過去あり。

山岡 哲二 背筋をピンと伸ばしてプレーする我がチームでは珍しいタイプだが、優雅さとは無縁の激しいタックルを身上としたストッパー。あだ名は、「テツ」。このあだ名と彼の角刈りからイカツイ人を想像しがちだが、彼の眉毛がそれを緩和していた。

[今松 泰、千原 勝、山岡 哲二]

■主な戦績■

①54年度総体予選（高2春）

2回戦 10-0 市神港

3回戦 3-2 武庫工

4回戦 1-0 関学

5回戦 0-3 柏原

(Best 16)

②54年度新人戦（高2夏）

2回戦 8-0 甲北

3回戦 2-0 神戸工

4回戦 6-1 鈴蘭台

本戦 1-1 御影

(PK14)

③54年度選手権大会（高2秋）

2回戦 5-0 猪名川

3回戦 2-1 相生

4回戦 1-2 尼崎北

佃先生には散々怒られた、あるいはとても怖かった、などという話をしてでも格別珍しいことでもないと思うので、ここではいささか個人的な思い出を述べてみたい。

38期は際立った成績を残したわけではないが、それでも高2の夏は調子が良かった。公式戦を含めて、8月を6勝1敗1分で乗り切った我々は、いささかの自信を胸に、秋最初の本戦へ臨んだのである。ところが1回戦で、それまで負けたことのなかった御影高校にPK戦の末あえなく敗れてしまった。そのため試合後には、キャプテンの上村と副キャプテンだった私は殴り合い（という程でもないが）の大喧嘩をしてしまい、これをきっかけに38期は真つ二つに分裂し、私は練習に出なくなった。佃先生は当然のことながら、練習に出ない私に怒りの鉄拳をみまわれた。しかし理由を知った先生は、懇懇と私を諭し、上村と引き合わせて和解させてくださったのである。

当時の我々は、お互いに「どうしてこんな奴と」と思ったのであるが、これを機会に私も練習に復帰して、サッカーを続けることができたのである。そして今でもサッカーが好きでいられるのは、両者の言い分を良く聞いたうえで適切な措置を取ってくださった先生のお蔭だと、今にして大いに感謝している。

[今松 泰]

(Best 32)

④54年度新人戦（高2冬）

◆神戸市予選リーグB組

4-1 育英

2-0 夢野台

(B組一位で決勝トーナメントへ)

◆決勝トーナメント

1回戦 1-0 兵庫工

2回戦 1-2 御影工

5、6位決定戦 1-0 灘

(神戸市5位で県中央大会へ)

◆県中央大会

1回戦 1-0 北条

2回戦 1-2 県西宮

(Best 16)